

看護基礎教育課程と小児看護学実習の変遷

— 新見公立短期大学30年間の歩みを通しての分析 —

上山 和子*・片山 陽子

小児看護学

(2011年11月22日受理)

本研究では、看護基礎教育課程の変遷を踏まえ、新見公立短期大学30年間の小児看護学実習の歩みから主に実習形態の変遷を振り返り、今後の看護基礎教育課程の基礎資料とすることを目的とした。その結果、開学当初より小児看護学実習に乳幼児健診などの外来実習を取り入れ、健康な小児に視点を置いた実習が行われていた。

すなわち、小児看護学実習30年間の変遷としては、開学当初から健康な小児に対する実習展開が行われており、現行の看護基礎教育課程においても学習効果が高い実習形態と言える。

(キーワード) 看護基礎教育, 小児看護学実習, 変遷, 30年間の歩み

はじめに

看護基礎教育課程は、看護婦規則が制定された1915年(大正4年)以来、看護制度の中に位置づけられた。昭和23年の保健師助産師看護師法施行規則(以下、施行規則とする)を受け、看護師国家試験科目が明記された。昭和24年には、文部省・厚生省令による保健師助産師看護師学校養成所指定規則(以下、指定規則とする)では、看護師養成の教育内容を示し、その後は時代の変遷とともに改正が行われてきた¹⁾²⁾。

その中で小児看護学は、昭和42年の指定規則での改正カリキュラムにおいて独立した分野として位置づけられた。その後の改正では、平成8年に大きな変更があり、今までの小児看護学実習3単位から2単位となった。

新見公立短期大学における小児看護学実習は、多くの看護基礎教育課程で取り入れられている病院実習だけでなく保育実習を含めているも、主に病院実習での実習形態を中心に展開してきた。

しかしながら、30年間の歩みの間に小児を取り巻く環境は大きく変化し、年少人口の減少、それに伴う入院数の減少がみられた。また、小児医療の発展による入院期間の短縮や感染症の重症化の減少など医療内容も変化してきた。

一方で、小児の育成に関連した問題も浮上してきており、健康障害に看護問題の焦点を当てた実習形態から検討していく必要性が生じ、社会的な背景を踏まえた小児看護学実習を展開してきた。

本研究では、看護基礎教育課程の変遷と社会的状況を踏まえ、新見公立短期大学30年間の小児看護学実習の歩みか

ら主に実習形態の変遷を振り返り、今後の看護基礎教育課程の基礎資料としての一助とすることを目的とする。

I. 研究方法

以下の2点から看護基礎教育課程と小児看護学実習の変遷を分析する。

1. 小児看護学の視点から捉えた看護基礎教育課程の変遷と分析
2. 新見公立短期大学における小児看護学実習の変遷の概要と分析

II. 結果

1. 小児看護学の視点から捉えた看護基礎教育課程の変遷
看護基礎教育課程は、昭和24年の指定規則の制定後、現在に至るまでに昭和42年、平成元年、平成8年、平成20年と大きく4回の改正が行われた。

昭和42年の改正では、小児看護が誕生し、今までの医学に偏った教育から人間の成長・発達区分による領域別看護を基盤とした教育課程となり、小児看護として独立し他の成人看護、母性看護などの領域の一つとして位置づけられた。

平成元年の改正カリキュラムでは、少子高齢化を踏まえて老年看護学が新設され、看護学は、基礎・成人・老人・小児・母性看護学の5体系となった。この改正では、少子高齢社会を反映したカリキュラム構成がとられた。

平成8年の改正では、単位制の導入、精神看護学概論、

*連絡先: 上山和子 新見公立大学 看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

在宅看護論が独立して設けられた。それに伴い小児看護学実習、母性看護学実習は、それぞれ3単位から2単位に減少した³⁾。

平成20年の改正では、個別の対象者を中心とした看護から、複数の対象者を中心とした看護及び安全管理や災害看護など、対象者の安全性に視点を向けた看護が新たにカリキュラムに追加された。この改正では、小児看護学において大きな変化はない。しかしながら、小児看護学実習は、実習病院施設の確保が難しいことから、病院以外での実習も可能とされた⁴⁾。

以上のカリキュラム変遷から小児看護学の動向を考えると、少子高齢化の人口動態の背景がカリキュラムの構成に大きく反映されている。

2. 新見公立短期大学における小児看護学実習の変遷の概要と分析

新見女子短期大学は、昭和55年新見市と阿哲郡の1市4町からなる運営母体として設立された。開学当初は、地域社会における専門職養成機関としての役割を担い、看護学科と幼児教育学科で構成された。平成8年には、地域福祉学科が併設され、平成11年には男女共学となり新見公立短期大学となった。さらに平成16年には、地域看護学専攻科が併設され、保健師の養成が始められた。

以上の保健・医療・福祉・教育の専門職の養成を母体とした短期大学の中で、看護学科30年間の歩みと共に小児看護学実習を改正カリキュラムの変遷を通して辿っていく。

開学時の看護学科の臨床実習は、1年次に基礎実習、2年次に成人看護Ⅰ実習、3年次に総合実習（広い視野から看護の機能・役割を理解することを目的としている）、各領域別実習（1）、及び選択実習（各領域別実習1で履修した内容をもとに、多角的視野から看護の探究を行う学習を目的としている）で構成されていた。

本研究では、各領域実習（1）の小児看護実習に焦点を当てて変遷を捉える。

1) 第1期：開学時から昭和63年まで

昭和55年の開学時のカリキュラムは昭和42年に改正されたカリキュラムを基に構成されていた。小児看護学は、2年次の小児看護概論1単位、小児看護2単位の講義、及び3年次の小児看護実習の3単位、併せて6単位で構成されていた⁵⁾。

開学時の小児看護実習の特徴としては、保育所、病院実習で構成されていた。病院実習は、1か所で外来実習と病棟実習で構成していた。病院実習は1か所で行われていたが、慢性疾患児の看護として退院後の家庭訪問に同行する家庭訪問実習を取り入れており、病院から地域での家庭療養に向けた継続看護実習が行われていた。また、病院実習では、乳幼児健診などの外来実習を取り入れていた。

保育所実習は、開学当初は3年次に行われていたが、2年次の小児保健の一環に取り入れ、実習形態を変更してい

た（図1）。

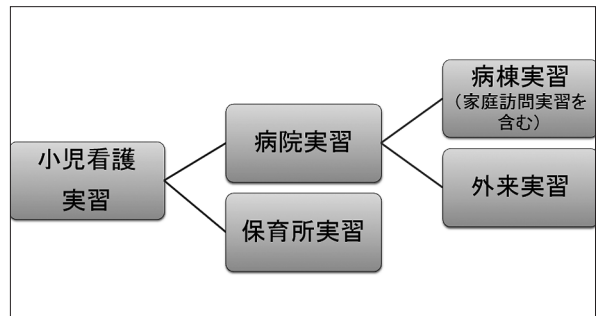


図1 第1期：小児看護実習の形態

2) 第2期：平成元年改正カリキュラムから平成7年まで

この時期の小児看護学は、2年次の小児看護概論1単位、小児保健1単位、小児看護2単位の講義、及び3年次の小児看護実習の3単位、併せて7単位で構成されていた⁶⁾。

小児看護実習は、2年次の保育所実習、3年次の病院実習で構成されていた。平成7年には1年間未熟児センター見学実習を取り入れていた。これは、総合実習の一環として行われていた実習を小児看護領域の未熟児看護の学習として取り入れていた。この実習は、主に見学実習であり、未熟児が治療を受けている環境を知り、看護場面を理解することを目的としていた。

保育所実習、及び病院実習の概要は、第1期と同じ形態で実習を行っていた（図2）。

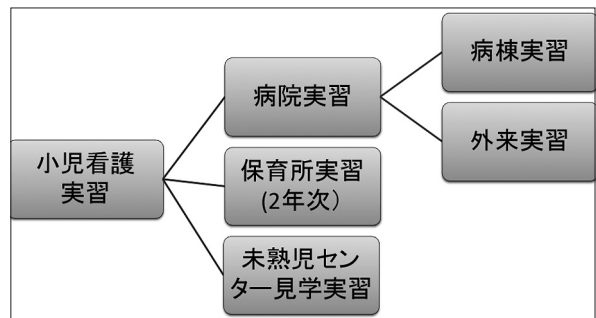


図2 第2期：小児看護実習の形態

3) 第3期：平成8年改正カリキュラムから平成19年まで

この時期の小児看護学は、2年次の小児看護学Ⅰ（概論）1単位、小児看護学Ⅱ（保健・医学）2単位、小児看護学Ⅲ1単位の講義・演習、及び3年次の小児看護学実習の2単位、併せて6単位で構成されていた⁷⁾。また、各科目名も小児看護から小児看護学に変更された。今回の改正カリキュラムでは、小児看護学実習が3単位から2単位に減少した。

カリキュラムの改正とともに平成8年以降では、小児の入院患者数の減少に伴い、受け持ちを主体とした病棟での実習展開が困難となり、2か所の病院実習に変更している。

その中でも病院実習は、第1・2期と同様に乳幼児健診

や予防接種を主とした外来実習を継続して実習展開を行っていた。

また、2年次の保育所実習を再び3年次の小児看護学実習に取り入れて、保育所・病院実習を一つの実習単位としている。

さらに、平成10年より看護の場を体験する実習として取り入れていた総合実習の中止に伴い、学校保健室実習を小児看護学実習に取り入れていた。学校保健室実習の目的は、乳幼児を主体とした病院実習だけでなく、学童期の健康問題を捉える実習として導入していた。この実習は、学生の出身学校の小学校や中学校で行っていたが、他の教育実習と重なり、中々実習場所の確保が困難となった。この背景を踏まえて平成15年より、地域看護学実習に移行した。

この時期の病院実習では、病棟だけの受け持ち制の展開では困難となり、外来実習に一般外来（プライマリケア）を導入し、家庭療養に目を向けた指導を体験するように変更していた（図3）。

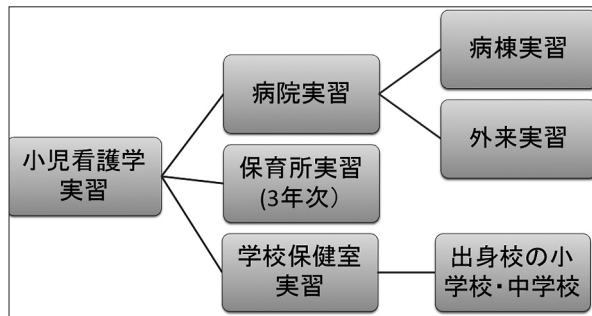


図3 第3期：小児看護学実習の形態

4) 平成20年改正カリキュラムより現在

この時期の小児看護学は、2年次の小児看護学Ⅰ（概論・保健を含む）1単位、小児看護学Ⅱ（医学）2単位、小児看護Ⅲ 1単位の講義、及び3年次の小児看護学実習の2単位、併せて6単位で構成されている⁸⁾。

実習形態は、保育所実習、2か所の病院実習で構成している。実習形態は、第3期とほぼ同じ実習形態をとっているも、病院実習では処置やケアに対する子どもへの具体的な説明方法（プリパレーション）やコミュニケーションを円滑に行うことを目的としたコミュニケーションツールの作成を導入している。一方の外来実習では、従来からの健康な小児看護である乳幼児健診、予防接種の看護を継続するとともに、一般外来でのプライマリケアの観点を取り入れ、家庭療養の指導に重点を置いた実習内容を導入している。この実習では、家庭での養育機能の低下を踏まえ、家庭療養の指導を目的としたリーフレットの作成などの試みを強化している（図4）。

5) 小児看護学実習の目的・目標の変遷

小児看護学実習形態の変遷を振り返るとともに、実習要

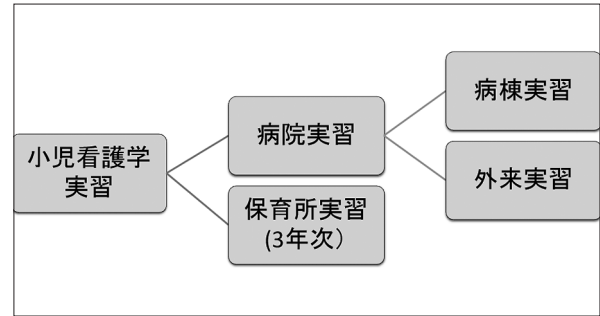


図4 第4期：小児看護学実習の形態

綱（要項）においては、対象である小児のあらゆる健康レベルを事前に認識するために小児看護学実習の構造化⁹⁾を提示するようにした。以下に全体的な学習構造図及び主な実習要綱（要項）¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾を示す。

(1) 小児看護学実習の構造化

小児看護学実習の構造化では、小児看護学実習の展開として保育所実習で成長・発達に関する基本事項を学習する。その内容を踏まえて外来実習で小児の発達・評価について学ぶ。次に病院実習で健康回復に向けた看護を学ぶ。この一環の流れを通して様々な健康レベルの看護を学ぶ（図5）。

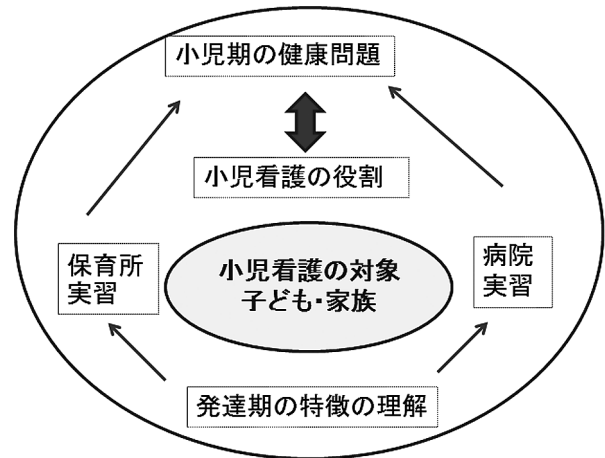


図5 小児看護学学習構造

(2) 小児看護学実習の実習要綱の変遷

小児看護学実習では、小児の発達段階を理解すること、及び小児看護の役割を理解することを基に実習要項の作成が行われてきた。変更点は、第1・2期における病児から第3・4期では健康障害をもつ小児とし、健康レベルを意識した表現とした（表1―表4）。

Ⅲ. 考察

1. 小児看護学実習の変遷からみた今後の看護基礎教育課程への示唆

表1 第1期：小児看護実習要項

目的	健康な小児の保育と病児への看護実践をとおし、小児の発達段階の特徴を理解し、健康上の諸問題をもつ小児の看護過程を展開する能力と態度を養う。
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する。 2. 発達段階の各期の病児および家族との人間関係を成立、発展させる能力と態度を養う。 3. 病児および家族の看護の必要性を認識し、看護過程を展開する。 4. 基本的な保育、および小児看護技術を病児に適應する能力を修得する。 5. 小児の健康、福祉に携わる種々の職種を理解し、看護の役割と責任を自覚する。

表2 第2期：小児看護実習要項

目的	健康な小児の保育と病児への看護実践をとおし、小児の発達段階の特徴を理解し、健康上の諸問題をもつ小児の看護過程を展開する能力と態度を養う。
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する。 2. 発達段階の各期の病児および家族との人間関係を成立、発展させる能力と態度を養う。 3. 病児および家族の看護の必要性を認識し、看護過程を展開する。 4. 基本的な保育、および小児看護技術を病児に適應する能力を修得する。 5. 小児の健康、福祉に携わる種々の職種を理解し、看護の役割と責任を自覚する。

表3 第3期：小児看護学実習要項

太字は変更箇所

目的	小児の発達段階の特徴を理解し、 健康な小児の養護 と健康上の諸問題をもつ小児への看護実践をとおし、 各健康レベルの小児の健康問題 をとらえる能力と態度を養う。
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する。 2. 発達段階の各期の健康障害をもつ小児および家族との援助的人間関係を成立、発展させる能力と態度を養う。 3. 健康障害をもつ小児および家族の看護の必要性を認識し、看護過程を展開する。 4. 健康障害をもつ小児に基本的な保育、および看護援助できる能力を習得する。 5. 小児の保健・医療・福祉・教育について理解し、小児の健康問題を幅広くとらえ、そこに携わる種々の職種を理解し、看護の役割を理解する。

表4 第4期：小児看護学実習要項

太字は変更箇所

目的	小児の発達段階の特徴を理解し、健康な小児の養護と健康上の諸問題をもつ小児への看護実践をとおし、 各健康レベルの小児の健康問題 をとらえる能力と態度を養う。
目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 健康な小児の発達段階の特徴を知り、その発達段階に応じた保育的な働きかけを理解する。 2. 発達段階の各期の健康障害をもつ小児および家族との援助的人間関係を成立、発展させる能力と態度を養う。 3. 健康障害をもつ小児および家族の看護の必要性を認識し、看護過程（看護問題）を展開する。 4. 健康障害をもつ小児に基本的な保育、および看護援助できる能力を習得する。 5. 小児の保健・医療・福祉・教育について理解し、小児の健康問題を幅広くとらえ、そこに携わる種々の職種を理解し、看護の役割を理解する。

看護基礎教育課程は、少子高齢社会の人口動態を踏まえた社会の変化とともにその社会の保健・医療に求められている内容を踏まえてカリキュラムの改正が行われている。

小児看護学実習は、平成20年のカリキュラム改正において、実習場所の確保が困難なことから、あえて病院実習に指定された従来の受け持ち制で看護過程を展開することを求めないこととし、独自の实習展開についても認めることとしている。今後も病棟実習を中心とした実習展開は、困難なことが予測される。このため、今後、外来実習を中心とした展開や他の場での実習展開が必要である。

本学の小児看護学実習は、開学当初から外来実習を取り入れて展開をしており、健康な小児に視点を向けた実習を展開してきた。その変遷の中で実習場の確保と併せて、看護の体験の場を検討しながら展開してきたと言える。

このことは、今後の看護基礎教育課程の小児看護学実習において、次世代を育てるという視点を継続しながら実習を展開していくことの必要性を示唆していると言えよう。

文献

- 1) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学第4版, 33-141, 医学書院, 2004.
- 2) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学第4版増補版, 医学書院, 33-143, 2009.

- 3) 「看護教育編集室」: 看護教育新カリキュラム展開ガイドブック 小児看護学 カリキュラム案とその展開, 医学書院, 2-8, 1997.
- 4) 大学・短期大学における看護学教育の充実に関する調査書会議報告書: 指定規則改正への対応を通して追究する大学・短期大学における看護学教育の発展, 2007.
- 5) 新見女子短期大学: 昭和57年度新見女子短期大学学生便覧, 1982.
- 6) 新見女子短期大学: 平成元年新見女子短期大学学生便覧, 1989.
- 7) 新見女子短期大学: 平成8年度新見女子短期大学学生便覧, 1996.
- 8) 新見公立短期大学: 平成20年度新見公立短期大学学生便覧, 2008.
- 9) 上山和子・木下香織: 対象の健康レベルの違いによる小児看護学実習の学習内容の分析と構造化 — 病院実習と学校保健室実習の学習内容の検討 —, 日本小児看護学会誌, 8 (2), 73-78, 1999.
- 10) 新見女子短期大学看護学科: 昭和57年度新見女子短期大学看護学臨地実習要項, 1982.
- 11) 前掲書, 5).
- 12) 前掲書, 6).
- 13) 前掲書, 7).
- 14) 前掲書, 8).

**Changes in basic nursing education and clinical practice in pediatric nursing
— An analysis of the thirty-year history of Niimi College —**

Kazuko Ueyama, Yoko Katayama

Pediatric nursing

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

This study, taking into account changes in basic nursing education, reviewed the changes that took place in the form of clinical practice in pediatric nursing during the thirty-year history of Niimi College in order to provide them as data for basic nursing education in the future. As a result, we observed that, since its foundation, the college has adopted clinical practice in outpatient care, such as health examination for young children, and provided clinical practices related to healthy children.

Thus, with regard to the thirty-year history of clinical practice in pediatric nursing provided at Niimi College, we observed that clinical practices related to healthy children have been provided since its foundation, and they are still effective in the present basic nursing education.

Key words: basic nursing education, clinical practice in pediatric nursing, changes, thirty-year history